

昭和34年、大学卒業後、東京都の教員として働く。平成9年、定年退職。現代は博物館等でボランティア活動をしている。

ある挑戦

「いやー、よかったですよ。お年のようですが元気ですね。私も見習いたいもんです。私は65歳ですが、我々老人の励みになります。」

群読音楽劇「銀河鉄道の夜」という舞台を終えた時のことだ。知人を迎えるために出入口で待っていた私の所に、見知らぬ男性が近寄って来て、話しかけてきた。

「よくあのような長い台詞を覚えられましたね。私なんかとても・・・、どうやって覚えたのですかー。」と質問してきた。

「いや、それが私だってなかなか覚えられませんでしたよ。ひどい目にあいました。何回も何回も繰り返し覚えるしかないです。なにしろ覚えちゃ忘れ、覚えちゃ忘れするんですからね」

このようなやり取りをして、その人は帰って行った。古希を迎えた私は、何か一つ挑戦してみようと思っていた。老人老人・・・と老人を邪魔者扱いするような風潮を感じる昨今、老人だってやればできるんだ ということを知らせたかったのだ。

そんな時、たまたま群読音楽劇「銀河鉄道の夜」を一般公募するという新聞広告を見たのだった。

群読を少々体験したこともあり、宮沢賢治の「銀河鉄道の夜」をどのように演出するのだろうかに興味を持った私は、受けて見ようと思った。しかし、古希を過ぎた年齢である。そんな年寄りをメンバーとして迎えてくれるだろうか、演劇なんて、小学校の学芸会以来、やったこともない、受かったとしても、最後までやり通せるのだろうか・・・と、いろいろな不安材料をかかえ、一抹の不安をいだきながらも、チャレンジしてみようと思決心した。

だが、家族には内緒の応募だ。もし落選したら恥ずかしいし、第一、相談したところで、たちどころに「いい齡して・・・そんなことやめなさい」と、一蹴されるに決まっている。それでだまって受けてみた。

案の定、オーディションは若い人ばかり。何人か中年もいたが、みな演劇に経験のある人たちばかりだった。

これでは受かりっこないと、あきらめて家に帰って来たのだが、数日後、合格の通知を受けた。全く予期していなかったことだったので、嬉しかったが少々あわててしまった。

練習が始まってからは大変だった。予想だにしていなかった踊りがあり、おまけに長い台詞を暗記するはめになったのだ。たった5日間の練習。私は電車の中でも暗記に励んだ。しかし、やはり齡には争えない。覚えたと思っても舞台上上がると忘れてつかえてしまう。いやになって逃げ出したくもなったが、メンバーに支えられ、若い人のエネルギーをもらいながら、チャレンジ、チャレンジ・・・と頑張った。おかげで3日間の公演を無事終えることができ、感慨無量だった。

舞台を終えてつくづく思うことだが、年を取っても、自分の好きなこと、やってみたいと思うことには、挑戦してみることだと思ふ。若い人たちと一緒にやることによって、そのエネルギーももらうことができる。見に来てくれた知人たちも、「若いね」とほめてくれた。声をかけてくれた人もそうだったが、何よりも嬉しいのは、お年寄りの励みになったこと、人のためになったことだ。それが自分自身の自信につながり、また挑戦してみようと、活性化していく。脳も働くようになる。

定年退職までは、家族のためと・・・と生活のために自分を犠牲にすることも多かったろう。会社のために苦しいこともあったろうが、これからは「自分」を大切に生き方をすることが、

なによりも大事なことなのだと、一つの挑戦をすることで気がついた。